

松之山地区では、二つの団体(松之山地区若手有志、黒倉集落)が、「大地の芸術祭 越後妻有 アートトリエンナーレ 2021」の作品誘致に取り組んでいます

芸術祭新聞

11月号
2020.11.10.
松之山
地区

作家の最終選考が行われています☆

2021年の大地の芸術祭開催に向けた、北川フラム氏による作品候補地の視察は終わりました。松之山地域においては、地域有志が作品候補地を案内させていただくことができ、作品誘致への地域の想いを北川氏に直接届けることができました。

現在は413の応募の中から作家の最終選考が行われています(10/22現在)。北川氏は「アートによる地域づくり」のための観点から、地域と作家とのマッチングをされています。

選出作家は年内にすべて決定する予定です。作家の選考が終わりしだい、作品候補地には、作品誘致の可否の連絡が入ることになっています。

北川フラム塾 ☆ 地域芸術祭のつくり方 次回開催は12/1(火)

北川フラム塾とは、大地の芸術祭のこれまでとこれからについてを学ぶ、勉強会です(主催:アートフロントギャラリー)。現地活動による学びの場もあります。

会場は東京ですが、十日町市内でもオンライン受講ができるため、作品誘致の取り組み支援のための研修として、地域支援員が受講しています。

これまでに説明会1回(7/15)と勉強会2回(8/12、10/6)が行われ、来年度までにあと5回開催されます。

地域有志による2021年の取り組みに向けて、フラム塾の内容や芸術祭の取り組みについて、少しずつご紹介させていただきます。



※説明会の様子。(写真提供:アートフロントギャラリー)

※オンライン受講はどなたでもできます。詳しくは大地の芸術祭公式HPをご覧ください。

北川フラム塾がはじまるきっかけとなった☆こへび隊再起動

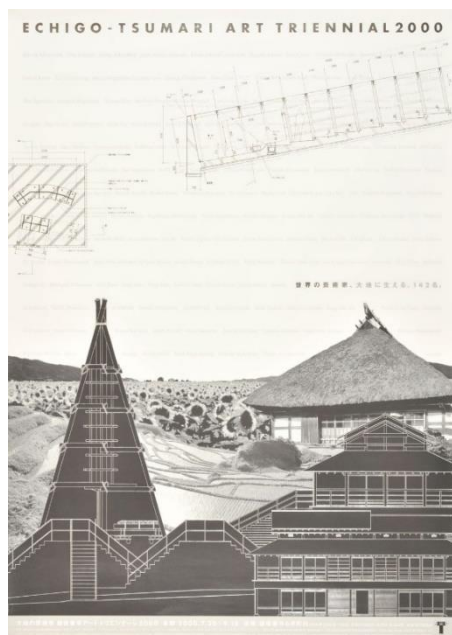
こへび隊は、芸術祭のはじまりの年に生まれた、サポーターチームです。

大地の芸術祭もこへび隊も、もともとあったのは、「越後妻有地域のためになることをしたい」「お年寄りを助けたい」という想い。

しかし年月を重ねる中でマンネリ化したり本来の意図が見失われてしまってきたことから、その在り方を今一度問い直すために、北川フラム塾が開催されることになりました。

北川氏は「こへび隊再起動説明会(7/15開催)」の最後を次のような言葉で締めくくっています。

『今日この場がそうだったように、皆様のご意見を伺いながら、原点に帰ってやっていきたい。「再起動」はもう始まっていますが、これからが正念場でもあります。来年の開催に向けて、そしてより長期的なビジョンに向けて、「大地の芸術祭」は、こへび隊やサポーターの皆さんとともに、前進していくことを目指します。』(大地の芸術祭公式HP記事より一部抜粋)



2020年芸術祭開催時のポスター

第一回 北川フラム塾

前半には、「大地の芸術祭」前史としての北川フラム氏のこれまでの取り組みについて、「美術」をどのように捉えてきたのかが語られました。

後半は、「前半の内容を踏まえないと芸術祭は分からないのだ」という観点で、芸術祭が生まれた背景について語られました。



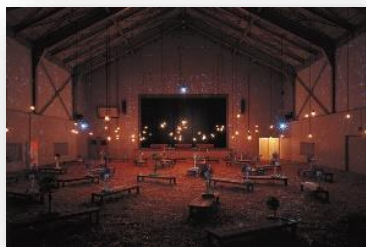
北川フラム塾から見えてくる☆大地の芸術祭の背景にある“想い”

● **大地の芸術祭**：1994年、新潟県知事が提唱した広域活性化政策「ニューにいがた里創プラン」から生まれた、交流人口の拡大等を図る10か年計画「越後妻有アートネックレス整備構想」が発端点。第一回開催は2000年。現在の越後妻有地域は、21世紀のアーティストの作品が世界で一番見られる場所かもしれない。



手塚貴晴+手塚由比「越後松之山『森の学校』キョロロ」Photo by ANZAI

● **シンボルマークの蛇**：蛇は神聖な生き物。守り神。脱皮しながら大きくなる。当時合併を控えていた6市町村を重ね、脱皮しながら力を合わせて大きくなっていくという願いを込めて選ばれた。



クリスチャン・ホルタンスキー+ジャン・カルマン「最後の教室」Photo by T.Kuratani

● **芸術祭の背景にあるもの**：過疎高齢化、里山衰退、地域コミュニティ崩壊という地域課題について、解決はできないが、解決のために何が必要かをみなが自発的に考え小さな実践から始めていく起点にはなり得る、という想い。

● **アートの芸術祭 10の思想** ①アートを道しるべに里山をめぐる旅 ②他者の土地にものをつくる ③人間は自然に内包される ④アートは地域を発見する ⑤あるものを活かし新しい価値をつくる ⑥地域・世代・ジャンルを超えた協働

⑦公共事業のアート化 ⑧ユニークな拠点施設 ⑨生活芸術 ⑩グローバル/ローカル

● **アート**：「アーティフィシャル」つまり「人間の手が関わったもの」。そもそも美術の始まりは古代壁画。自然や動物との関係の記録、手形等で「自分」を表す手段。自然を直感的に捉えていた、科学とか自然を真剣に考えていた時代に生まれたもの。美術は空間体験があってこそ感動がある。アートは77億人の生理・多様性の表れである。



マリナ・アブラモヴィッチ「夢の家」Photo by ANZAI

● **美術の現状に対する失望**：「オークションに代表される金融商品としてのみの美術」「権威的なシステムの在り方」「裾野の狭さ」により、現代においては、美術は楽しめる、面白いものではなくなってしまったのかもしれない。芸術祭のテーマである「人間は自然に内包される」には、アートを通して自然と人間の関わりを考えることが根底にある。



三省ハウス Photo by NOGUCHI Hiroshi

● **日本一人口が多かった新潟県**：明治維新の頃まで。

● **越後妻有**：“トドノツマリ”や“ドンツマリ”から言葉を取ったともいわれる。ここに行き着くまでに様々な人を受け入れてきた地域。

● **世界の社会問題**：2000年前後は南北問題、マルチメディア、AIDS、医療。食料問題、都市比重増、難民・外国人労働者、環境問題等。2020年前後は気候変動、移民難民、植民地体制の継続、資本主義の限界等。

● **平成の大合併**：地域は学校単位という暮らしの基盤を失った。学校単位というコミュニティの重要性を認識した時代。芸術祭は、集落という単位を大切にしている。

● **パンデミックの中で停滞したもの**：人類の活動の基本であった「移動する」「話をする」ということ。

※掲載写真は松之山地域内の大地の芸術祭作品です。(写真提供：アートフロントギャラリー)



アンドリュー・バーンズ・アーキテクト「オーストラリア・ハウス」Photo by NAKAMURA Osamu

今後の予定

- 新規の作品誘致の可否については、連絡が入り次第「芸術祭新聞」でお知らせいたします。
- 作品誘致が決定した場合には、作家と地域との話し合いが始まります。
- 松之山地区若手有志、黒倉集落ともに、“アートをきっかけに老若男女が繋がれる取り組みを行うことで地域を元気にしたい！”と考えています。地域皆様のご理解とご協力をお願い致します。